

『蛇』小論

前田 淳

- 一、はじめに
- 二、勿れ勿れの教
- 三、『蛇』と『雁』と
- 四、その他

一、はじめに

森鷗外に『蛇』と題する短篇小説がある。明治四十三年十二月九日の日記に、「蛇を草し畢る」とあり、翌四十四年一月に、「中央公論」に発表されたものである。

あらためて言うまでもなく、『蛇』は現代にその材を採った所謂「現代小説」である。口語体で書かれた最初の小説『平日』（明治四十二年三月）以来、鷗外の筆はこの分野の作品を豊かに生み出して来た。『蛇』以後も、『雁』を始めとする作品を生み出して行く。大正元年の『興津弥五右衛門の遺書』までの間に、現代小説の殆どが書き尽くされていることを考えると、『蛇』は、作者鷗外の現代小説創作の筆力が旺盛であった、そのただ中で生み落とされた一篇である、と

言うことが出来るであろう。

『蛇』に関する論は、これまでにどれ程あるのだろうか。夙くは、岸由美子氏の論⁽¹⁾があり、近くは竹盛天雄氏⁽²⁾、大屋幸世氏の論⁽³⁾がある。「鷗外選集」第三巻に書かれた小堀桂一郎氏の解説も新しい所であろう。

しかし、これは鷗外研究の盛んな今日にあつて、多い数では決してあるまい。『蛇』は注目されることの余りない短篇である、と言ってもよいであろう。（但し、この短篇の怪異譚的性格に注目して、『蛇』を取りあげた選集も、最近二、三ある。）

この小説は、しかしながら、実に様々な問題を提出している。問題となりそうな事柄を恣にあげてみよう。『蛇』という題、「蛇」の記号的な意味、篇中の杜詩の意味、宗教についての意見、善人悪人に関する論、オオソリチイや平等に関する意見、千足の性格、女性に関する意見、等々である。議論の材料となるべき問題が、多く提出されているのである。

これらをひとつひとつ考えてみることに、それぞれの視点から鷗外の姿を明らかにする有力な方法であることは、疑いを容れない。私は、今ここにあげられた小さな問題のいくつかを考えて、『蛇』を理解する手懸りをさぐろうとする。『蛇』の全体を組上に載せ、あ

るいは、『平日』との連関を論じ、あるいは、『蛇』以後の作品との連関を考える、という構想は、小論の外にある。私は、この小篇の私に不明な箇所を、いくらかでも明らかにしたいと願うばかりである。ただ、これらの小問が私の問いかけに答えた所が、作品とともに、作者鷗外の姿にも一条の光を投ずることにでもなれば、私はうれしい。

二、勿れ勿れの教

西洋文明とあれ程深く交わっているながら、鷗外にはキリスト教に関する発言が殆どない⁽⁴⁾。その数少ない発言の一つが、この『蛇』の中のそれである。『蛇』の中にはキリスト教に触れた箇所が三箇所数えられる。その一は、清吉爺さんの伝える千足の父の言葉である。その二は、『己』が千足に答えた「基督の山の説教なんぞを」云々の言葉である。その三は、「勿れ勿れの教」という言葉である。この「勿れ勿れの教」という言葉について、些か、文字を費してみたい。千足の問に答えて、『己』が「それはなんと云つても、男の方は、理性が勝つてゐるのでしょうか。」と言う所がある。『己』は、更に語を継いで説明を続ける。その中に次のような文言がある。

Dogma は承認しない。勿れ勿れの教には服せない。

この「勿れ勿れの教」とは、一体何のことなのであろうか。何か特定の教えを頭において、鷗外は書いたのであろうか。直前の文「Dogma は承認しない。」も、特定の何かを指すような文である。

ところで、鷗外に特徴的な修辭に左のようなものがある。

あらゆる芸術は Liebeswerbung である。口説くのである。性欲を公衆に向つて發揮するのであると論じてある。(『キタ・セクスアリス』)

先に外国語をあげて、次にその語の解を出すという修辭である⁽⁵⁾。『蛇』の右の二文も、このような関係で結ばれているのではないのであろうか。即ち、上の「Dogma」が、下の「勿れ勿れの教」と解されているのである。

この「Dogma」という語は、キリスト教から出た語である。これと、「勿れ勿れの教」の「勿れ」が繰り返される印象的な修辭とに注意して考えると、まず思い出されるのが、『出エジプト記』第二十章に見える「十戒」である。

「十戒」が明治の文学において、どれ程親しい文章であつたか、それは、たとえば、『明治文学全集』(筑摩書房)の索引を見ればよい。そこには、関係する語を含めて、五つの例があげられている。鷗外が『蛇』を執筆した当時の聖書で、「十戒」は一体どのような表現になっていたのであろうか。大日本聖書館から出た「明治三十六年四月五日」の日付をもつ『舊新約聖書 引照付』を見ると、「十戒」は次の通りである。⁽⁶⁾ (二重傍線筆者)

汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず^三
汝自己のために何の偶像をも彫むべからず^四 又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず^五 之を拜むべからずこれに事ふ

べからず我エホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代におよぼし 我を愛しわが誠命を守る者には恩恵をほどこして千代にいたるなり

汝の神エホバの名を妄に口にあぐべからずエホバはおのれの名を妄に口にあぐる者を罰せではおかざるべし

安息日を憶えてこれを聖潔すべし 六日の間勞きて汝の一切の業を爲べし 七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲べからず汝も汝の息子息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中にをる他国の人も然り 其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の中の一切の物を作りて第七日に息みたればなり是をもてエホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ

汝の父母を敬へ是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に汝の生命の長からんためなり

汝殺すなかれ
汝姦淫するなかれ
汝盗むなかれ
汝その隣人に對して虚妄の證據をたつるなかれ

汝その隣人の家を食べるなかれ又 汝の鄰人の妻およびその僕婢 牛 驢馬ならびに凡て汝の隣人の所有を食べるなかれ

右の文章では、後半は「なかれ」で文末が結ばれているが、前半は「なかれ」のかわりに、「べからず」という語が文末を結ぶ。とはいえ、この引用の後半部分だけでも「勿れ」が繰り返される修辭を示すには、十分であるかも知れない。

ところで、鷗外はいかなる種類の聖書を使用していたのであろうか。

鷗外最晩年の著作に『古い手帳から』という文章がある。この文章の「基督」及び「使徒及師父」という章に聖書からの引用が見える。

爾欲完全、往售所有、以濟貧、則必有財於天、且來從我。我誠告爾、富人入天國、難矣哉。我又語爾、駝穿針孔、較富人入神之國、尤易也。(新約、馬太、XIX 21, 23, 24)

右は、その一例である。漢訳聖書なのである。鷗外が漢訳聖書を見ていた、ということであれば、先の「十戒」の文章を漢訳聖書で見てもおくことも意味のないことではあるまい。

漢訳聖書には、一体どの様なものがあるのだろうか。また、鷗外の使用した漢訳聖書は、どういふものであったのだろうか。⁽⁷⁾ 今、中之島図書館に左の様な扉書をもつ一本がある。

耶穌降世一千八百六十三年
新約聖書⁽⁸⁾
蘇松上海美華書局藏板

『古い手帳から』の漢訳聖書引用部分と、この本の該当部分とを照らし合わせてみると、一文字を除いて他は全て一致する。⁽⁹⁾

この『新約聖書』には、それと組であると考えられる「舊約聖書」がある。そこから、「十戒」の部分の引いて、ここに示して見よう。⁽¹⁰⁾ (二重傍線筆者)

我之外、爾母別有神。爾母爲己雕刻偶像、或作諸形狀、彷彿

在上天、下地與地下之水中所有者。^五爾母俯伏向之、亦母服事之、蓋我耶和華爾之神、乃嫉妒之神、討父之罪及其子孫、至惡我者之三四代。惟愛我而守我誠者、則施恩至於千代。爾母^七妄稱爾神耶和華之名、蓋妄稱其名者、耶和華必不以之為無罪。爾宜誌安息日、守之為聖日。^九六日間、宜勞而作爾諸工。^十第七日、乃爾神耶和華之安息、是日母作諸工、爾與爾子、爾女、爾僕、爾婢、爾畜、及旅於爾門內者皆然。蓋六日間、耶和華創造天、地、海、與其中萬物、至七日安息、故耶和華祝安息日、以之為聖。爾宜敬爾父母、致爾日可長在爾神耶和華所賜爾之地。爾母殺人。爾母姦淫。爾母偷竊。爾母妄證爾鄰。爾母貪爾鄰之屋、亦母貪爾鄰之妻、與其僕、其婢、其牛、其驢、及凡爾鄰所有者。

先の文語訳で、「べからず」と結ばれていた部分が、ここでは全て「母」という文字になっている。「母」は言うまでもなく、「なかれ」と訓読する文字である。

鷗外が見ていた（であろう）漢訳聖書では、「十戒」の今、問題とする結びの「べからず」が、全て「なかれ」という語になっていたのである。「なかれなかれ」という繰り返しとなっていたのである。もうひとつ。上司小剣「木像」（明治四十三年五月六日〜同七月二十六日）の次の一節をあげておこう。

御身は頻りに神を悪く云はれ候が、神の十戒に、汝の神エホバの名を妄りに云ふ勿れとあり（後略）

この部分は、先の文語訳聖書では、左のようになっている。

汝の神エホバの名を妄に口あぐべからず

上司小剣は、「十戒」の「べからず」を、「なかれ」と言いかえている。これは、当時「十戒」が「なかれ」という結びをもつ文章だ、と意識されていたからこそ、起りえた言いかえの例ではないであろうか。ともあれ、以上から、「勿れ」を結びに重なる修辭に注意すると、「勿れ勿れの教」は、「十戒」の文章だと結論することができらるであろう。

三、『蛇』と『雁』と

動物の名をとつて題とした小説には、『蛇』の他に、『鶏』『雁』などがある。『鶏』は、しばらく措いて、今『雁』について考えてみたい。というのは、以下に指摘するように、題字の扱いに似た所のあるこの二篇を比べてみれば、『蛇』の性格がその一部でも明らかになるであろうと考えるからである。

小説『雁』において、読者は題に使われた「雁」の一字の意味を、全く知らされぬまま、物語を読み進む。その意味が明らかにされるのは、一篇が読了される、殆ど直前とでも言うべき所である。そこに至るまで、「雁」の一字は、作者のかけた謎とでも言うべきものであり続ける。こうした謎をかけることによつて、作者鷗外は、読者の注意を「雁」の一字に惹き留めようとしたのであろうか。そうであれば、お玉の存在が「不しあはせな雁」と重なり合うことによ

って、この文字に込められた謎が、読み解かれた時に生ずる雁の象徴的效果は、それだけ大きい、と言えるであろう。

「雁」の一字に読者の注意を惹き留めた鷗外の筆は、『蛇』においても同様の趣向を用いて、私たちの注意をそらすまいとするかのようである。

——『蛇』の読者は、「蛇」の一字がこの小篇の中で何を意味するものなのか、明らかにされぬまま、物語を読み進む。この間、「蛇」の一字は作者のかけた謎とでも言うべきものであり続ける。その意味が明らかになるのは、物語も最後に近いあたりである。そこで蛇が小説の舞台に登場し、それがお豊さん発狂の原因であったことがあかされる。ここに至ってはじめて読者は、「蛇」という文字が何故使われたのかを知る。——と書いて来れば、この筆の運びが『雁』のそれと似た趣向を用いていることに気が付くであろう。

とは言え、この二篇において、それぞれの動物が荷う意味は同じではない。

『雁』では、語り手の口から「僕の写象には、何の論理的連繋もなく、無縁坂の女が浮ぶ。」(貳拾参)と説明が加えられている。これは、雁とお玉とを結ぶ文言である。いわば謎ときである。こうした謎ときをしなければならなかったこと自体が、すでに雁とお玉とに、「論理的連繋」が存在しなかったことを示していると言われようが、それはまた、いかにも詩的であり、象徴的である。ここで、一篇の中心たるお玉を雁に関係づけたことで、題字「雁」の意味は、にわかにその重みを増すことになる。

一方、『蛇』では、そこに出現した蛇について、『雁』にあったような説明を作者の口から聞いたであろうか。そこには、事実を叙述する文章はあっても、「蛇」の意味をあらためて説明するような文章

はない。ここでの謎ときは、事実の散文的な叙述によって行なわれる。

ここで蛇の存在が、お豊さん発狂の原因だということに限られるのであれば、それが一篇の中に占める意味は、大きくない。

しかし、果してそうであろうか。小説『蛇』において、『雁』に見たような説明がないのは、そこに「論理的連繋」が、すでに存在するからなのではないのか。説明の必要がないからなのではないのか。私は、「蛇」がこの小説の中で果す役割を、お豊さん発狂の原因という具体的事件の要素であるとともに、加えて、それを超えて何らかの象徴的な意味を荷っているものである、と考えるべき所にいるようである。

そう思つて、今一度作品に戻ってみると、いたる所に理解の鍵となる文言があることに気がつく。

- ①奥さんが線香を上げに、佛壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを巻いてゐましたのが、鎌首をあげて、ちつと奥さんのお顔を見たさうでございます。
- ②昨日奥さんの御病氣になられたのでからが、御隠居様を疎々しくなされた罰だなんぞと囁き合つてゐるらしい。
- ③迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥ぢ入ります次第でございますが、

これだけの引用でも、明らかであろう。『雁』で「雁」の意味に説明を要したのは、その意味が作者個人の詩的な解釈を俟ってはじめて成立するものであったからである。

一方、『蛇』において、この種の説明を見ることがないのは、「蛇」

の意味が作者一人の解釈といったようなものではなく、「迷信」という社会的な理解を背景に持っていたからなのである。

それでは、その「迷信」とは、一体どういうものなのであろうか。簡単な資料を示して、それを明らかにしておく。

抑、蛇というものは、一般に気味の悪い動物とされる。この小説に見るような怪異と結び付いた時、それはどんな意味を持つのであろうか。

手元にある『江戸怪談集(中)』(岩波文庫)に収められる、この種の作品では近世の代表作である『伽婢子』を見ると、「蛇、瘻の中より出づ」という小品が見付かる。¹⁰⁾ その中の文言を左に引いてみる。

其の上、その妻妬み深く、内に召し使ひける女の童を、夫寵愛せし事を腹立ち悪みつ、女の童が首もとに噛み付きて、喰ひ切りければ、血の流るる事滝の如し。鉄漿黒く付けたる齒にて噛みければ、疵、深く腐りて、終に女の童空しくなれり。其の恨み深くして今此の蛇となり、妻が頂に宿りて怨を報じ侍り。たとひ今取り出だされたりとも終には殺して怨みを晴らさんものを(後略)

さて、ここで注意すべき所に、私は圈点を付した。恨みを抱いて死んだ女が蛇となり、その恨みを晴らすという所である。

ここで再び『蛇』に戻って考えれば、まさに同じ解釈が成立する出来事が起っていたのである。千足の母が死んで初七日の晩、母を疎んじたお豊さんの目前に蛇が出現し、それ故、お豊さんは発狂する。その蛇の現われた場所は、仏壇の中であつた。お豊さんには、恨みを抱いて死んだ姑が、無気味な意図をもって、まがまがしい動

物に姿を変え、死後再び目前に立ち現われたように見えたのである。これがここにいる「迷信」である。¹¹⁾

蛇を見て発狂したこのお豊さんの頭は、おおよそ合理的とは言えない。それは前時代の怪談の世界から、さして離れていないのである。ところが、千足が描くところのお豊さんは、といえば、人の性を見極めたようなことをいう女である。当時の高等教育を受けた女である。思えば、実に皮肉な鷗外の女性観である。

四、その他

『蛇』という題の意味を少し考えたので、それと関連する、この短篇の特徴について、もう少し考えてみよう。

これまでの考察から、「雁」をお玉の詩的象徴であるとすれば、「蛇」は、迷信の、更には、合理的ではないものの象徴であるともいえるであろう。

合理的な精神にとって、迷信が迷妄の所産であることは分明であつた。蛇にまつわる迷信も、理学博士である「己」には、迷妄であることが明らかであつた。「己」は蛇を少しも恐れていない。蛇の性質を、論理的に手短かに説明し、「兎に角此蛇はわたしが貰って行かう。」と言って、簡単に退治してしまう。

この結末は、「己」の合理的精神が、迷信の非合理を批判した結果である、と考えることができる。このあたりに、一篇の趣意が存するのではあるまいか。すなわち、合理的精神による非合理的なるものの批判である。

そこで、この結末に至るまでに、何か同種の考えが示されてはいないか、と思つて読み返せば、果してそれは、篇中のいくつかの議論のうちにも見いだされるのである。

そのひとつは、千足の伝えるお豊さんの「善人」に関する意見である。

妻の考えでは人間に眞の善人といふものは無い。若し有るとしても、広い国に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいふもので、實際附き合つてゐる人の中には、そんなものゝ有りやうがない。善い事をしたり言つたりするといふのは、為めにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。これに反して、悪い事は誰もしたい。併しそれを吹聴するには及ばないから、黙つてゐる方が好い。よし又言ふにしても、悪い事の方なら、正直に言ふのであるから、虚偽でもなければ、卑劣でもないといふのです。

これは、お豊さんなりの人間観察に基づく意見であるかも知れない。しかし、「人間に眞の善人といふものは無い。」と言ひ放つたあたりは、確かに「嘉言善行といふやうな話」に対する反発もあつたのではあるが、独断といへば独断といわれよう。

お豊さんの、この善人悪人の論に「己」は直接の批判を陳べていない。唯、「善い事をしたり言つたりするといふとは、為めにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。」というお豊さんの潔癖な、狭量な意見については、「人間は利害關係丈でも本当に分かつてゐれば、むちやな事は出来ない。基督の山の説教なんぞを高尚なやうに云ふが、あれも利害に慫へてゐるのですからねえ。」とい

う風な批判をしている。

とは言へ、先にも書いた通り、善人悪人の論については、何らの意見をも述べていないのである。そこで、「己」ならぬ鷗外自身の意見はどうであつたのか、と考へてみる。

ここに、「当世比較言語学」(明治四十三年)という文章がある。その中に次の様な文言を見いだすことができる。

人の行為の動機はわからないものと Kant が云つてゐる。芸術家の物を作る動機も恐らくはわかるまい。序だから云ふが、人間の心は醜惡なものだと前極をして置いて、醜惡でない心を書くのを posee だとするもの、矢張動機の穿鑿で、あぶない話だ。醜惡の心を書く poseur も無いには限るまい。

さて、これはお豊さんの「眞の善人といふものは無い。」という意見を独断として批判する意見である。「悪い事の方なら、正直に言ふのである」というお豊さんの意見に疑問を投げかける立場である。作者鷗外がお豊さんの意見を批判する立場から、小説中の議論を書いていることは、明らかである。ここで、独断非合理なるものと解すれば、先に考へておいた一篇の趣意が、ここにも生きていることが見て取れるであらう。

ふたつめは、オオソリチイについての意見である。千足の言葉をまず引こう。

去年でしたか、東京にゐた頃、学校で心安くした友人が温泉へ来たといふので、わたくしの所へ寄りました。その男がかう云ふ事を言つたのです。妻を持つて子供が沢山出来た。と

ころが、其妻が、authorityといふものを一切認めぬ奴で、言ふ事を少しも聞かない。それでは親に済むまいとか、お上に済むまいとか、神様に済むまいとか、仏に済むまいとか、天帝に済むまいとか云はうとしても、どれも此女に擱まへさせる力草にはならない。どうも今の女学校を出た女は、皆無政府主義者を見たやうな思想を持つてゐるやうだと、さう云うのです。其時はわたくしもこの男は随分思ひ切つた事を云ふと思つて聞いてゐましたが、好く考へて見ると、わたくしの妻などもオオソリチイは認めません。

千足は、お豊さんのこういった傾向に驚きと恐れを隠さない。「己」はどうか、といえ、すぐ後に利害関係を支点とする意見をのべている。但し、それが人間社会の最も高い真理であると、「己」が考えていないことは、「利害関係丈でも」という言葉遣いから明らかであろう。ただ、それが分れば、ある程度社会の秩序が保たれるものという限りで、その価値を認めているのである。つまり、これは、オオソリチイの崩壊という事態を根本から受けとめた上での発言ではない。(この後、鷗外は、『興津弥五右衛門の遺書』の中に、「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」という有名な言葉を残している。)

オオソリチイの崩壊という事態を、鷗外はどうとらえていたのであろうか。先の場合にひき続いて、お豊さんの意見を批判する立場に立っているであろうか。また、鷗外の社会的な立場から考えても、オオソリチイを擁護する立場であろうことは、十分に考えられるのである。

ここに『混沌』(明治四十二年三月)と題する文章がある。この中

で鷗外は次の様に言っている。

彼の混沌たる物の中には、幾ら意表に出た、新しい事を聞いても、これに應ずる所の物がある。頭からそれに反抗するには及ばない。構はず自分の一身の中にある物に響の如く応ぜさせて見る。それには余り窮屈な考を持つてをてはいけな。今の時代では何事にも、Authorityと云うやうなものがなくなつた。古い物を糊張にして維持しようと思つても駄目である。Authorityを無理に弁護してをても駄目である。或る物は崩れて行く。それならば崩れて行つて世がめちやめちやになつてしまふかと云ふと、さうでは無い。人は混沌たる中にあらゆる物を持つてゐるのでありますから、世の中に新思想だとか新説だとか云ふものが出来て来て活動して来て、どんな新しい説でも人間の知識から出たものである限は、我々も其萌芽を持つてゐないと云ふことは無いのです。

と言っているのである。こういう考えを持つ作者が、千足と同じような驚きと恐れを感じていたとは、思われぬ。千足やお豊さんなどよりも、見通しの利く見地から、この兩人を批判していたのであろう。

千足を批判する作者は、新しい教育を受けた女お豊をも、いわば新時代の迷信にとらわれた者として批判しているとも言ふことができる。

「蛇」が迷信に代表される非合理を象徴し、その「蛇」を退治することで、非合理一切を批判する、という一篇の趣意は、明らかであらうが、その精神が、新しい時代の思想にとらわれた「迷信」を

も批判しているのは、注意しておいてよい。

しかし、残念なことに、それらの「迷信」を批判した作者が、その批判の先に何らかの道を示しえたか、といえ、そうではない。ここで作者がなしたといえ、事態を如実に見、それを示したといふとどまるのであろう。

注

本文の引用は、全て『鷗外選集全二十一巻』（岩波書店）によった。

- (1) 「蛇」と「半日」（森鷗外小論）所収
- (2) 「蛇」について（鷗外 その紋様）所収
- (3) 「鷗外『蛇』を読む」（国文鶴見18）
- (4) 座談会「鷗外の文学と人間」（『文学』昭和四十七年十一月号）の「8 鷗外とキリスト教」での寺田透氏の発言。
- (5) 他に同じ「キタ・セクスアリス」から
○芸術に猥褻な絵などがあるやうに、pornographieはこの国にもある。姪書はある。
○ぢいさんがそんな事を言ったのは、子供の心にも、profanationである。褻瀆であるといふやうに感ずる。
- (6) 本文から、ルビと引照の便に付された記号を省いて、引いた。
- (7) 野溝七生子氏「森鷗外と聖書（二）」（『鷗外』第八号）に、鷗外文庫中の外国語訳聖書があげられている。坂本秀次氏「『鷗外文庫』目録抄第六回」（『鷗外』第三十号）には、キリスト教関係の蔵書が、六部あげられて

いる。その中に「旧新約全書 明治27 刊本二」と見える。未見。

(8) ただし、各丁には、「新約全書」とある。

(9) 相違する一字は、次の通りである。「古い手帳から」は、「信者皆会同、公諸物」（『使徒行伝』II 44）、「新約聖書」は、「信者皆会同、共用諸物」となっている。「公」と「共」との相違である。

(10) この扉書は次の通りである。

癸亥即耶穌降世一千八百六十三年

舊約全書

江蘇滬美華書館活字板

(11) 「明治文学全集」（筑摩書房）72巻所収。

(12) 本文を「江戸怪談集（中）」からあげておく。

蛇、癭の中より出づ

河内の国錦郡の農民が妻、頂に癭出でたり。初めは蓮肉の大きさなるが、漸く庭鳥の卵の如く、後には終に三、四升ばかりの壺の大きさなり、斯くて三升の後に二升を入るる瓶の如し。

甚だ重くして立ちて行く事叶はず。もし立つ時には、かの癭を人に抱へさせて行く。更に痛む事なし。度々は癭の中に、管絃音楽の声聞こえて、是に心を慰むに似たり。其の後、癭の外に、針の先ばかりなる、細く小さき孔、数千あきて、空曇り雨降らんとする時は、穴の中より白き煙りの立つ事、糸筋の如くして、空に昇る。

家の内の男女、皆怖れて、「此のまま家に留め置かば、禍と成らんも

知らず、只遠く野山の末にも送り捨てよ」と云ふ。此の妻、泣く泣く男に語るやう、「我が此の病、まことに誰れか嫌ひ悪まざらん。されば遠く捨てられたらんには必ず死すべし。又是を割き開きたりとも死すべし。同じく死すべくは、割き開きて中に何か有る見給へ」と云ふに。夫、げにもと思ひ、大きな剃刀を求め、よく磨ぎて妻が頂の癭のさしらを、堅さまに割り侍りしが、血は少しも出でず。

疵の色白けて、中より蹕ね破り、飛びて出でたる物を見れば、長二尺ばかりなる蛇、五つまで突き出であり。其の色、或には黒く或ひは白く、又は青く又は黄色。鱗立ち、光有りて、庭の面に這ひ行きしかば、家人皆驚き打ち殺さんとす。夫、更に制して許さず。

時に当たりて庭の面に、一つの穴出で来て、蛇皆其の中に入りたり。其の穴、深くして底を知らず。斯くて神子を頼み、梓にかけて此の事を尋ねしかば、神子口走りて云ふやう、「其の上、この妻妬み深く、内に召し使ひける女の童を、夫寵愛せし事を腹立ち惡みつ、女の童が首もとに噛み付きて、喰ひ切りければ、血の流るる事滝の如し。鉄漿黒く付けたる歯にて噛みければ、疵、深く腐れて、終に女の童空しくなれり。其の恨み深くして今此の蛇となり、妻が頂に宿りて怨を報じ侍り。たとひ今取り出だされたりとも、終には殺して怨みを晴らさんものを」と云ふ。

側に居たる人の云ふやう、「其の事は返らぬ昔になり侍り。心を宥めて与へよ。其の為には僧を請じて、跡よく弔ひ侍らん」と云へば、神子また口ばしりけるやう、「其の時の恨み誠に骨に徹り、幾たび生を替ゆるといふとも、忘るべき事にはあらず。されども跡弔ひて得さすべしと云ふが嬉しきに、是にぞ心を慰み許し侍らん。とてもこの事に望む処あり。叶へて得させんや」と云ふ。

側なる人、「如何なる事也とも、かなへて得さすべし。とくとく云へ」

と云ふに、神子うちうなづき涙を流し、「此の世に生きて有りし時より、尊き物は法花経なりと思ひ侍りし。今猶尊く覚ゆるに、一日頓写の経書きて、回向して弔ひて給へや。又其の疵には胡桐涙を塗り給へ」とて去りにけり。言葉の如く僧を請じて、一日頓写の経書きて深く弔ひしかば、妻が心地も涼しくなりぬ。さて胡桐涙を尋ね求めて塗りければ、癭の疵、終に癒えたり。妻それよりして、物妬みの心をとどめ侍りとぞ。

(卷十三の三)

(13) 竹盛天雄氏前掲書 四八九頁。

(平成三年九月三〇日受理)